

気にいらない鉛筆

小川未明

青空文庫

次郎じろうさんはかばんを下さげて、時計とけいを見上みあげながら、

「おお、もうおそくなつた。はやく、そういつてくれればいいのに、なあ。」と、お母かあさんや女じよちゆう中こごとに小言こごとをいいました。

「毎朝まいあさ、ゆけと注ちゆうい意いされなくても、自分じぶんで気きをつけるものですよ。」と、お母かあさんは、おつしやつたきり、なんともいわれませんでした。

すると、次郎じろうさんは、ぶつぶついつていましたが、

「きよ、僕ぼくが学がっこう校がっこうから帰かえつてくるまでに、これと同じ鉛筆おな えんぴつを買かつておいてくれね。」といいながら、かばんの中なかの鉛筆えんぴつを出だして、ちよつと見みせて、銭ぜにをそこへ投なげ出だしました。

「自分のことは、自分でなさい。」と、お母さんが、おつしやつたけれど、次郎さんは、ききませんでした。

「きよ、買っておくんだよ。」と、次郎さんは、念を押しました。坊ちゃん、どこに売っているのをごぞいますか。」

この春、田舎から出てきたばかりの、女中のきよは、たまげたように、赤いほおをしてたずねました。

「本屋にもあれば、角の文房具屋にだってあるだろう。」次郎さんは、そういうとあわててくつをはいて、

「いつてまいります。」と、いつて、かけ出していつてしまいました。

「自分のことは、自分でするものだといつてもきかないのだから、

かまわんでおいとくといいよ。」と、お母かあさんは、おつしやいましたけれど、きよは、仕事しごとがすむと、鉛筆えんぴつを買いかにいつてまいりました。

午後ごごになると、妹いもうとの光子みつこさんが、先さきに帰かえつてきました。それからまもなく、次郎じろうさんのくつつ音おとがして、元氣げんきよく、

「ただいま。」といつて、帰かえつてきました。ちようど、お母かあさんは外がいしゆつ出でなされてお留守るすでありました。次郎じろうさんは、机つくえが上うえにあつた鉛筆えんぴつをとりあげて見てみていましたが、

「僕ぼくのいつたのと、ちがつているけれど、よく書かけるかしらん。」
 こういつて、小刀こがたなで鉛筆えんぴつを削けずりはじめました。しんが、やわらかいとみえて、じきに折おれてしまうのです。

「こんな鉛筆で、なにが書けるもんか。」

次郎さんは、かんしやくを起こして、女中を呼びました。

「きよ、なんでこんな鉛筆を買ってきたんだい。やわらかくて、書けないじゃないか。ちがつているから返しておいでよ。」と、鉛筆を投げつけて無理をいたしました。

次郎さんが、怒つて出ていってしまった後で、きよは、どうしていいかわからないので、鉛筆を手にとって、お勝手もとで泣いていました。こんなときは、田舎が思い出されて、どんなに、自分の家が恋しかったかしのれません。

いまごろ、麦の青々とした圃では、ひばりがさえずっているだろう。また、野路へゆくと白い野ばらの花が咲いて、ぷんぷん

香におっていることなどが、しみじみと考かんえ出だされて、いつそうふるさどがなつかしかつたのです。

「どうしたの？」と、このとき、光みつこ子さんがきてやさしくたずねてくださいました。

きよは、泣ないたりして恥はずかしいと思おもつたので、前まえ垂たれで、涙なみだをふきました。

「私わたしが、まちがって、ちがった鉛えんぴつ筆を買かってききましたので、もうしわけありません。」といいました。

「どうして、この鉛えんぴつ筆がいけないの。」と、光みつこ子さんはききましました。

「やわらかくて、折おれるのです。」と、きよは、悲かなしそうに答こたえ

ました。

「兄にいさんが、わるいんだわ。」

「いいえ、私わたしが、わるかったのでございます……。」「と、きよは、うつむきました。

「自分じぶんのことは、自分じぶんでせいと、いつもお母かあさんがおつしやつているのですもの。」「と、光子みつこさんはいつて、走はしつて、自分じぶんの筆入ふでいれの中から、新あたらしい鉛筆えんぴつを持もつてきました。

「これを兄にいさんにあげるといいわ。私わたし、やわらかいのをもらつておくから。」「と、きよに、鉛筆えんぴつを渡わたしました。きよは、ほんとうに、うれしく思おもいました。

「きよの田舎いなかには、やまゆりがたくさん咲さくの?」

「山^{やま}へゆくと、たくさんございます。」

「うちの花壇^{かだん}のが、咲^さいたからいつてみましようよ。」と、光^{みつこ}子

さんは、きよをつれて、お庭^{にわ}へ出^でました。

やまゆりの花^{はな}が、脊^{せいたか}高く、みごとに開^{ひら}きました。きんせんか

や、けしの花^{はな}も、美^{うつく}しく咲^さいていました。きよは、やさしいお嬢^{じょう}

さんのことを、国^{くに}の妹^{いもうと}に書^かいて送^{おく}る中^{なか}へと思^{おも}つて、散^ちつた、真^まつ

赤^かなけしの花^{はな}弁^{びら}を拾^{ひろ}つたのであります。

風^{かぜ}に葉^はが光^{ひか}つて、ひらひらとちようちようが飛^とんでいました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第6刷発行

※表題は底本では、「気《き》にいらぬ鉛筆《えんぴつ》」となつています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：仙酔ゑびす

2012年2月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

気にいらない鉛筆

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>